

里山グループ



エコグループ

◆久しぶりの里山

高城 光一

のっけから私ごとで恐縮ですが、ここ8カ月ほどアレルギーと血尿と肩の筋肉痛が続き里山の活動に参加できませんでした。まだ完治しておりませんが8カ月ぶりに復帰しましたので、しばらく振りに見た里山の感想を述べてみたいと思います。

◆ 山には危険が

今回執筆担当になったのでネタ探しのため、活動日の前日一人で薪割り場から山に入ろうとしたらいきなり蜂の羽音、見ると1匹のスズメバチが「立ち入り禁止」とばかり威嚇しているのです。慌てて逃げ戻りましたが山にはマムシもあり、こんな人里近くの里山でも危険がつきものだとつくづく感じた次第です。

◆ 薪事情の変化

遅ればせながら、青木さんに注文すると既に6人ほどの予約の先行があるとのこと。加えてコナラの原木が枯渇してきたとのこと。原木事情につき杉山さんに伺うと、山の整備は今後一定区画ごとの皆伐方式に切り替えるので、コナラ以外のソヨゴなどの雑多な樹種が薪に回ること。コナラやクヌギは熱量が高く、火持ちがいいので薪として重宝されるが、雑木を使う場合は売り方を見直す必要がありそうです。

◆ コナラの幼木が順調な生育

コナラやクヌギはどんぐりを発芽させ、幼木を育て植樹されていますが、5年ほど前に植樹されたコナラの幼木が立派な若木に成長しているのが目に留まりました。皆伐され太陽光に恵まれた土地に植樹されると成長が早いものです。ところでこの前の冬、ここのコナラは枯葉をつけたままのヤツが目につきました。落葉は広葉樹にとっては低温と強風から身を守り、不要な物質を廃棄するトイレのような役割をもっているそうです。なぜここのヤツは落葉しないのかどなたかご教授下さい。

◆家のナスの病気

田中 暉英

我が家の裏庭の菜園は、近所の建物が迫っている風通しの悪い狭い土地。そこに多くの種類の野菜を密集、密着して植えている。コロナ感染を防ぐために人に避けるように言われている三密と同じ状態。今まで何度も夏野菜、特に唐辛子、ナス、トマト等ナス科野菜が青枯れ病や半身萎凋病(はんしんいちょうびょう)にやられている。これらの病気は土壤中で根から感染する。おそらくこの密な状態も原因の一つ。狭い土地で連作を避けながらこれらの野菜をうまく育てるのはなかなか難しい。何かヒントはないかとネット検索で野菜の病害について調べてみた。「野菜の病害発生の三要因」という記事によると主因は病原体の存在、素因は植物の元々の素性や状態(性質や体力)、誘因は環境条件で、この三つが揃うと病気になる。病気を防ぐためには、この三つが揃わない努力をすればよいと。

病原体は8~9割は俗にカビと呼ばれる菌類、細菌は一割未満、残りがウイルス。病原菌はどこにでもいて絶つことはできない。素因を断つ方法は病害に強い品種や、病害に強い台木を用いた接ぎ木苗の採用。根張りを良くして健全生育促進させて抵抗性を高める等々。今年ナスを植えるにあたり、接ぎ木苗とし、ある家庭園芸誌の記事を参考に肥料をどっさり入れて植え付けた。3株を株間80cmとし1株当たり元肥にボカシ肥料を600ccと堆肥を移植ゴテ一杯。植える場所の半径30cm×深さ15cmの土に混ぜた。それでも梅雨のころに半身萎凋病になった。台木のトルバムが伸びていたので体力をつけるため高さ40cmくらいまで伸ばした。ナスの枝を緩い切り戻しをした結果、何とか持ちこたえ今は秋ナスも採れている。来年は土壤感染からくる病気を完全に防ぐため、消毒した土を使って肥料の空袋等を利用した袋栽培も1株くらい試してみようと思っている。